第47回 全日本大学男子選手権大会

平成24年9月1日（土）～3日（月）
埼玉県坂戸市・鶴ヶ島市／坂戸市民総合運動公園・鶴ヶ島市運動公園

早稲田大（東京）33 7年ぶり2度目の優勝

日ソ協記録委員
常岡　昇

標記大会は、過去に国体の成年女子、インターハイ男子の会場として利用された埼玉県坂戸市・坂戸市民運動公園の3会場と国体の成年男子の会場となった鶴ヶ島市運動公園において、各ブロック予選会を勝ち上がった32チームの精鋭が参加して開催された。

坂戸市は、「武蔵野のみどりと太陽のあふれる、ながい歴史と伝統にはぐくまれたわがまち」をキャッチフレーズにし、また、鶴ヶ島市は、「人を・暮らしを・地域を元気にすることをめざし、市民と行政が一体となって地域づくりを進めている」まちである。

大会は、30度を超す猛暑の中で行われた。初日の午前中は、天候がよく、順調に進行したが、午後に入ると雷雨等による中断が3試合あったため、夜間照明施設のなかった第2多目的運動場の4試合目が軟式球場Bの5試合目に移動し、試合終了時刻は21時47分となった。2日目は、降雨の影響により2試合目以降、鶴ヶ島市運動公園サブグラウンドから多目的広場に移動し、試合が行われた。この移動に際し、迅速な対応を取っていただいた会場委員の皆さんに対し、心より感謝申し上げたい。

大会初日は、1回戦16試合が行われた。5試合がコールドゲームとなったが、僅差の試合が多く、手に汗握る熱戦が展開された。

2日目は、2回戦8試合と準々決勝が行われ、2回戦で一昨年優勝の環太平洋大（岡山）が初出場の九州共立大（福岡）に逆転負けを喫し、敗退。九州共立大（福岡）は、続く準々決勝でも、昨年の覇者・中京学院大（岐阜）を破り、ベスト4進出を果たす大健闘を見せた。

ベスト4には、3年連続のベスト4進出ながら、前回、前々回は3位止まり。19年ぶりの決勝進出を狙う中京大（愛知）。7年ぶり2度目の優勝をめざす早稲田大（東京）。初出場で快進撃を続ける九州共立大（福岡）。「優勝候補」に挙げられていた名門・日本体育大（東京）を破って勢いに乗り、初の決勝進出を狙う神戸学院大（兵庫）の4チームが勝ち上がった。

大会最終日は、毎試合大量得点を挙げ勝ち上がってきた早稲田大（東京）と、接戦の連続を制し、僅差のゲームをモノにしてきた神戸学院大（兵庫）が決勝に進出。

決勝は、攻守に勝る早稲田大（東京）が11得点を挙げ、5回コールド勝ち。5試合中4試合にコールド勝ちを収めるという圧倒的な強さで7年ぶり2度目の優勝を飾った。

また、今大会において、早稲田大（東京）の太田宗之祐が、8連続安打、最高打率8割3分3厘の大会新記録を樹立。チームの優勝に貢献した。

〈準決勝〉

中京大	00000	0
早稲田大	2024x	8

※大会規定により5回得点差コールド

（中）●深津―和田
（早）○古川―平野

▽㊀大川（早）
〔審〕P関谷 1森糸 2重信 3関口
〔記〕田中

後攻の早稲田は初回、2番・太田が自身の連続安打記録を「8」に伸ばす左前安打で出塁すると、すかさず二盗。これが捕手の悪送球を誘い、三進。3番・吉田の中前安打でまず1点を先制。さらに四球、内野ゴロで二死一・三塁とし、6番・溝口の中前に抜ける安打でこの回2点を挙げ、試合の主導権を握った。3回裏には、相手守備の乱れに乗じて2点を加え、4回裏には打者一巡の猛攻。4本の長短打を集中し、一挙4点を追加。予想外の一方的な試合展開となった。

守っては、エース・古川が中京打線を1安打に抑え込み、二塁を踏ませぬ好投。見事な完封で5回コールド勝ち。決勝進出を決めた。

〈準決勝〉

九州共立大	00000001	1
神戸学院大	11000000x	2

（九）●前田―山田
（神）○片岡―丸山

▽㊁川島（神）

〔審〕Ｐ川尻　１小柳　２海老原　３古牧
〔記〕渡沼

後攻の神戸学院は初回、二死から３番・川島が中越ソロ本塁打を放ち、１点を先制。２回裏には５番・大道が二塁横を抜く安打で出塁すると、ワイルドピッチ、犠打で三進。７番・河添の左前適時打で追加点を挙げた。

守っては、エース・片岡が７安打されながらも堅守に助けられ、最少失点に抑える力投。初の決勝進出を完投勝利で飾った。

一方、初出場ながら一昨年、昨年の覇者を倒すなど、快進撃を続けてきた九州共立は、４回を除き、毎回安打。走者は出すものの、決定打を奪えず、７回表、二死から７番・小林の左前適時打で１点を挙げ、一矢を報いたが反撃もここまで。準決勝で力尽きた。

《決勝》

| | | |